『 津島歴史紀行 』

サイズ：A5版　　ページ数：330 ページ

本書では津島の個性的な歴史像を把握するため、特定の時代の歴史ではなく、中世から近世までの津島の歴史の全体像（通史）について記述しました。

津島が史料に現れるのは 12 世紀後期のことです。現在の津島は内陸部の都市ですが、古代の頃から古木曽川の「湊（津）」でした。16 世紀の津島は伊勢の桑名とを船でつなぐ尾張の湊町であり、津島牛頭天王社の門前町であるという二つの特徴をもった尾張有数の中世都市に発展しました。本書は、中世から近世にかけての津島の歴史像を描くことを試みました。

構成

第１部　中世　津島の風景

文献史料に限らず、史料として津島の各寺社縁起、町名、街道跡、文化財などについて調査考察しました。それらを繋ぎ合わせ中世から近世にかけての津島の発展過程を描きました。

第２部　近世の津島を歩く

19 世紀初期に成立した『尾張徇行記』には、津島は「尾西第一の大邑にして、縦横の町並五十余街、商家農工軒を並べ万物一として足らざる事なく」と記されているように尾張有数の在郷町として大いに繁栄しました。江戸時代には、疫病退散の津島牛頭天王社に民衆が群参しました。夏季大祭である津島天王祭にも諸国から多くの代参人が訪れ尾張第一の祭礼に発達しました。

発行日：平成 20 年（2008）3月 29 日　第３刷
著　者：黒田剛司
発行所：泰聖書店
頒価：1,890 円（税込）　送料：210 円